



黄遵憲「日本雜事詩」 訳注稿(二十七)

林, 香奈
劉, 雨珍

(Citation)

未名, 42:185-204

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504953>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504953>



黄遵憲「日本雜事詩」訳注稿（二十七）

林 香奈
劉 雨珍 訳注

A 「其百九十六」

西京城比錦官雄 西京城は錦官に比して雄なるも

呉織何如漢織工 呉織 ^{くれはとり} 漢織 ^{あやはとり} の工みなるに何如

菊葉葵枝盤大緑 菊葉葵枝 大緑を盤らし

飛魚天馬簇真紅 飛魚天馬 真紅 ^{あつ} を簇む

「韻字」雄・工・紅（上平一東）

B ①西京 京都。

②錦官 四川省成都。錦を掌る役所があつたことから錦官城と称した。杜甫「春夜喜雨」詩（「杜詩詳註」

卷十）に「曉に紅の湿う処を看れば、花は重からん錦官城」とある。③第二句 呉織・漢織は大陸から渡来した機織りの技術

をもつ工女。『日本書紀』には、応神天皇三十七（三〇六）年春二月に「戊午の朔に阿知使主、都加使主を呉に遣わし、縫工女を

求めしむ。……呉王 是に於いて工女兄媛、弟媛、呉織、穴織の四婦女を与う」とある。また雄略天皇十四（四七〇）年には「春

正月の丙寅の朔にして戊寅に、身狭村主青等 呉国の使いと共に呉の献れる手末の才伎、漢織、呉織と衣縫の兄媛、弟媛等を將

いて、住吉の津に泊す。……三月、……衣縫の兄媛を以て大三輪神に奉り、弟媛を以て漢の衣縫部と為す。漢織、呉織、衣織は是れ飛鳥衣縫部、伊勢衣縫らが先なり」とあり、呉織・漢織が渡来したことが記されている。いずれも優れた技術を伝え、その綾絹は珍重された。この句では、それに対して日本の錦（特に倭錦）の技術はどうかということを言うかと解した。本来は「何如呉織漢織工」とすべきところを平仄の都合で入れ替えたか。

④第四句「飛魚・天馬」はいずれも蜀錦の名。元の費著撰『蜀錦譜』に蜀で織られた錦の名称を列挙しているが、その中に「細色錦名色。……真紅天馬錦、真紅湖州大百花孔雀錦、真紅飛魚錦、四色湖州百花孔雀錦」と見える。同じ記述は『格致鏡原』卷二十七所引の「蜀錦譜」にも見える。

C 京都のまちは錦官城（成都）よりも立派だが、中国の呉の国から連れてこられた織工である呉織や漢織の巧みな技術に対して、倭錦の技術はどうであつたのだろうか。菊や葵の模様で青青とした図案をめぐらし、蜀錦で知られる天馬や飛魚を称する錦には（蜀錦と同じように）真紅を施している。

D 三国志に著す所の倭錦は、未だ何如なるかを知らず。史に言う雄略十四年、呉人 漢織・呉織の女工を遣り来りて、始めて織有り。西京に出づる所の錦は至だ佳し。杜陽雜編に曾て称するに女王国に明霞錦有り、光耀芬馥にして、五色相い間る、と。其の美艶なること知るべし。菊は王家の徽志為り、葵は旧將軍の徽志為り、故に此を織ること甚だ多し。真紅天馬錦、真紅飛魚錦は、皆な蜀錦の名に沿う。

E ①三国志所著倭錦 「倭錦」は日本で織った錦。唐錦に対する称。『三国志』魏書・倭人伝の正治四（二四三）年に、「倭王復た使の大夫伊声耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口、倭錦、絳青織、緜衣、帛布、丹木、玃、短弓矢を上献す」とあり、倭錦を

献上したことが記されている。

②史言

『日本書紀』雄略天皇十四年に見える。注B③参照。また『続日本紀』和銅四(七一

一)年閏六月丁巳には、「挑文師あやとりしを諸国に遣して始めて錦・綾を織ることを教え習わしむ」とも見える。

③杜陽雜編 唐・蘇鶚

撰『杜陽雜編』巻下に「大中の初め、女蛮国は双龍犀を貢ぐに、二龍有り、鱗鬣爪角悉く備わる。明霞錦は水香麻を鍊りて以て之を為すと云う。光耀芬馥なること人に著らかにして、五色相い間り、中国の錦よりも美麗なり」とある。④蜀錦 蜀の地で生産された色彩豊かな錦。注B④参照。杜甫「白絲行」(『杜詩詳註』巻二)に、「絲を繰るに長きを須もちい白きを須もちいず、越羅蜀錦金粟の尺。」

F 『三国志』に著されている倭やまと錦は、未だに何如なるものであるかがわからない。史書には、雄略十四年、呉人

が漢織・呉織の女工を日本に派遣して、始めて織物職人が日本に存在するようになる。京都で産出される錦はとりわけ素晴らしい。『杜陽雜編』にはかつて次のように謂っている。女王国には明霞錦があり、光輝き美しく、五色が入り交じっている、と。その美艶なることは推して知るべしである。菊は王家の紋章であり、葵は旧將軍家の紋章であるので、これを織ることは非常に多かった。真紅天馬錦、真紅飛魚錦は、いずれも蜀錦の名に依る。

G 『日本国志』巻四十「工芸志」「織工」に次のように見える。

応神帝三十七年遣阿知使臣、都加使臣於呉、求縫織工。有兄媛、弟媛、呉織、穴織四人来、始学作錦繡。(考『拾遺記』称、員嶠山有冰蚕、長七寸、黑色有角有鱗、以霜雪覆之、然後作繭、長一尺、其色五彩、織为文錦、入水不濡、以之投火、経宿不燎。唐尧之世、海人献之、尧为黼黻。是書多神仙誕妄之辞、固不足据。『韻府統編』采『杜詩集注』称、漢武帝時日本貢麒麟錦十端、金花炫目。亦不言書所自出。考魏景初中、賜倭女王以絳地交龍錦疋、紺地句文錦三疋。女王即応神母后。又越数十年、

乃始遣使求織工、則漢武時貢錦之說亦不足憑也。雄略帝時又有手末才伎漢織、吳織來、於時秦公酒獻絹、賜姓為禹豆麻佐。蓋中古時既能習織工矣。自通使隋、唐、學為蜀錦、如真紅天馬錦、真紅飛魚錦、双窠錦、青綠瑞草雲鶴錦、青綠如意牡丹錦、宜男百花錦、穿花鳳錦、鴛黃水林檎錦、并沿其名、西京所產最為美麗。製錦之外、能為絹、為紬、為綾、為縮緬、（如今之縐紗。）縮緬者引之則伸、放之則縮、多絵為柳絲、梅点、竹竿、桃葉、清麗宜人。別有一種名綴錦、其法不用大機、取熟色經于木檔上作、花草禽獸樓閣、以小梭先疏其処、用雜色線綫綴於經緯之上、合以成文、承空視之、如彫鏤之象、亦如中国刻絲法也。

A 「其百九十七」

入網青鯊化虎難 網に入るるの青鯊 虎に化すること難し

皮留飾器味登盤 皮は飾器に留め味は盤に登る

鼠腸魚翅均珍錯 このわた ふかひれ 鼠腸 魚翅は均しく珍錯

借箸同籌補食單 箸を借りて同に食單を補わんことを籌る

〔韻字〕難・盤・單（上平十四寒）

B ①青鯊化虎難 鯊。明の屠本峻『閩中海錯疏』卷上、鱗部上「鯊」に、「虎鯊は、頭目凹にして身に虎文有り。鋸鯊は、上唇

は長さ三四尺、両傍に齒の鋸の如き有り。狗鯊は、頭は狗の如し」、また明、李時珍『本草綱目』卷四十四鱗之三の「鯪魚」の集解に「時珍曰く、……背に斑文の虎の如き有り、而して堅強なる者は、虎沙と曰い、亦た胡沙と曰う。虎魚の化する所と云う」とある（『格致鏡原』卷九十二にも見える）。鯪は「虎鯊」とも称されるため、鯊が「虎に化する」と言ったか。注②参照。②皮

留 実藤氏の指摘のとおり、「虎は死して皮を留む」という諺に基づく。宋の鄭樵「与景章兄投字文枢密書」（『夾漈遺稿』卷三）

に「人は死して名を留め、虎は死して皮を留む」とあるのにもとづく。③飾器 「飾器」は装飾を施した甲冑や武具をいう。

『周礼』夏官・掌固に「其の飾器を設け、其の財用を分かち、其の稍食を均しくす。」鄭玄注に「飾器は、兵甲の属」とある。ここでは鮫革が武具や馬具などに用いられたことを言う。

④鼠腸 このわた。海鼠の腸を塩辛にしたもの。『和漢三才図会』江海無鱗魚の「海鼠」に「海鼠腸は、腹中に黄腸三條有り、之を淹して醬と為す者なり、香は美にして言うべからず、冬春に珍肴と為す、色は琥珀の如き者は上品と為し、黄中に黑白交じる者は下品と為す。正月を過ぐれば則ち味は変わり、食するに堪えず、其の腸中に赤黄色の糊の如き者有るは、海鼠子と名づく、亦た佳し」とある。

⑤魚翅 ふかひれ。

⑥珍錯 山珍海錯。山海

の珍味。⑦借箸 相手の箸を借りる。人の為に画策する。ここでは日本人の箸を借りること。『史記』留侯世家に「食其未だ

行かずして、張良 外従り来りて謁す。漢王 方に食い、曰く「子房前め。客に我の為に楚の権を撓めんことを計る者有り」と。

其れ酈生の語を以て告げて曰く、「子房に於いて何如」と。良曰く「誰か陛下の為に此の計を画りし者ぞ。陛下の事去れり」と。漢王曰く「何ぞや」と。張良對えて曰く「臣請う前の箸を藉せ、大王の為に之を籌らん」と、『集解』に「張晏曰く、食する所の箸を借りて用て指画せんことを求むるなり」とある。『漢書』張良伝では「借箸」に作る。

⑧食單 メニュー。宋の鄭望之『膳

夫録』食單に「韋僕射巨源に焼尾宴食單有り」とある。

C 網にかかった鮫が虎に化けることは難しいが、死しては皮を留めて武具や馬具を飾り、美味は皿に登る。鼠腸と魚翅はいずれも珍味。(日本人の)箸を借りてともに食譜に補おう。

D 近海に鰵魚を産すること多し、漁する者は翅を折りて之を乾かし、中土に販売し、以て海錯の佳品と為す、東人は未だ食する者有らず。海鼠(即ち海參なり)は其の腸を剝りて、之を蓄うること瓶を以てし、東人は以て極品と

為す。顧だ中人の未だ食する者有らず。

E ①海鰒 海の幸。『尚書』禹貢に「厥の貢は塩鱈、海物は惟れ鰒」、偽孔伝に「鰒は一種に非ず」。②海鼠（即海參） 「海鼠」はなまこ。「海參」はいりこ。なまこの腸をとって茹でて干したものの。

F 近海には鰒が多く獲れるので、漁をする者はフカのひれを折ってこれを乾かし、中国に販売し、海産物の良品としているが、日本人でこれを食べる者はない。海鼠（つまり海參である）はその腸をえぐり取り、それを瓶の中に蓄える。日本人はそれ（このわた）を極上の品とするが、中国人で食する者はいない。

G 『日本国志』卷三十五「礼俗志」二「魚醬」に次のように見える。

所造魚醬有蝦醬、海胆醬、鰻魚醬、堅魚醬、烏鰂醬、沙嘿醬諸品、俗謂之峙烏加喇、蝦醬、俗云阿弥時烏加喇、備前所造最佳。海胆、（胆俗作丹）。此云烏弥、出越前及对馬者、香味最美。……烏鰂醬、越前人称伊加黑造、烏鰂此云伊加、切肉和墨塩而醬之、故云黑造。沙嘿此名曰谷、生者曰那麻谷、腊者曰伊利谷。那麻谷煮食不如作膾之佳、洗净、滌其腸縷、切、澆以薑酢、味極脆美。其醬則取腸臟塩而醃之、亦為魚醬中之佳品。伊利谷即海參也。（『五雜俎』曰、「能温補、足敵人參、故曰海參。」『医林四書』曰、「海參出海中、長岐島夷人称海蛆、有黑白二色、長二三寸、大寸許、周身有肉刺而黑者為佳、一種無肉刺、色帶白名為肥皂參、次之。」按、長岐即長崎之誤、蓋漢人不知伊喇谷之製、海舶歲來長崎得之、因名曰海參。海蛆亦当作海鼠。『和名類聚鈔』引崔禹錫『食經』曰、「海鼠似蛭而大、酥名古。」）

A 「其百九十八」

紫帶青條擇海苔 紫帶青條 海苔のりを択ひび

如雲昆布翠成堆 雲の如き昆布こんぷは翠 堆を成す

珊瑚七尺交柯好 珊瑚七尺 柯えだを交えて好しく

合與王家鬪富來 合に王家と富を闘わせ来るべし

〔韻字〕苔・堆・來（上平十灰）

B ①紫帶青條 紫の帶と青い枝。ここでは海藻の類を指す。

②海苔 のり。左思「吳都賦」（『文選』卷五）に「江離の属、海

苔の類」、劉涓子注に「海苔は、海水の中に生じ、正青にして、状は乱髪らんぱつの如し、之を乾かし亦た塩藏しんざうす、汁有り、名づけて濡苔と曰い、臨海 之を出す。」 ③王家 西晋の王愷。石崇と豪奢を競った。『世說新語』汰侈篇に「石崇 王愷と豪を争い、並びに

綺麗を窮め、以て輿服を飾る。武帝は愷の甥なり。毎に愷を助け、嘗て一珊瑚樹の高さ二尺許を以て愷に賜う。枝柯扶疎として、世に其の比たぐひ罕なり。愷以て崇に示す。崇視訖りて、鉄の如意を以て之を撃ち、手に応じて碎く。愷既に惋惜わんせきし、又た以て己の宝を疾めりと為し、声色甚だ厲し。崇曰く、恨むに足らず、今 卿に還さん、と。乃ち左右に命じて悉く珊瑚樹を取らしむ。三尺四尺にして、條幹絶世、光彩目に溢るる者六七枚有り。愷が許ばかりの比たぐひの如きは、甚だ衆し。愷惘然自失す。」

C 紫の帯や青い枝のような多くの海藻の中から海苔を選び出す。雲のような昆布は翠の山を成す。七尺もある珊瑚は交叉する枝振りもよく、王家と富を闘わせるほどである。

D 中人の海物を購う者は、鰕魚かきを以て大宗と為す。次いで乾鰩ほしだい、次いで海苔のり、次いで鰻うなぎ、次いで昆布。昆布は、

吾が輩は呼びて海帶と為す者なり。珊瑚は或いは紅或いは白或いは黄にして、毎に六七尺なる者有り。

E ①鰓魚 あわび。『漢書』王莽伝下に「莽は憂慙して食する能わず、^{ただ}酒を飲み、鰓魚を^{くち}啗う」、顔師古注に「鰓は、海魚なり」とある。また『後漢書』伏隆伝に「鰓魚を献ず」とあり、李賢注に「鰓は、^{はきり}蛤に似るも偏にして石に著く」とある。②乾鰓 鰓を天日干しにした乾物。③鰓 「鰓」はウナギだが、国字ではスルメ。ここでは海産物を挙げているので、スルメを指すか。

F 中国人で海産物を買い求める者は、あわびを正統とする。次いで干し鰓、次いで海苔、次いでスルメ、次いで昆布である。昆布は我が国では海帶と称するものである。珊瑚は紅やら白やら黄色のものがあるが、どれも六、七尺はある。

A 「其百九十九」

異魚怪鳥兼奇獸 異魚怪鳥と奇獸と

圖象爭陳博覽場 圖象 争いて陳ぶ博覽場

幾輩守株猶待兔 幾輩か株を守りて猶お兔を待ち

何人歧路哭亡羊 何人か歧路に亡羊を哭する

〔韻字〕場・羊（下平七陽）

B ①第二句 「図象」は、ここでは博物館に展示されている画像等。「博覽場」は自注にある「博物館」を平仄・押韻の都合で

言い換えたもの。②守株猶待兔 『韓非子』五蠹に「宋人に田を耕す者有り、田中に株有り、兔走り、柱に触れて頸を折りて

死す、因りて其の未を翫てて株を守り、復た兔を得るを冀う、兔は復た得べからずして、身は宋国の笑いと為る。今 先王の政を以て、当世の民を治めんと欲するは、皆な株を守るの類なり。」自注にはかつて日本には兔がいなかったとする。③歧路哭亡

羊 別れ道で逃げた羊を見失つて歎くこと。何一つ得られなかったことの喩え。『列子』説符に「楊子の鄰人 羊を亡い、既に其の党を率い、又た楊子の豎を請いて之を追う。楊子曰く、嘻、一羊を亡うに、何ぞ追う者の衆き、と。隣人曰く、歧路多しと。既に反りて、問う、羊を獲るか。と。曰く、之を亡えりと。曰く、奚ぞ之を亡うと。曰く、歧路の中に又た歧有り、吾 之く所を知らず、反りし所以なりと。……心都子曰く、大道は多歧を以て羊を亡い、学者は多方を以て生を喪う。」

C 不思議な魚や鳥獸などの図像が競うように並べられている博物館。しかし日本では、珍しい白兔をずっと株を守って待ちつづける有様。まるでわかれ道で羊を亡ったことを歎いた人のようで、いったい誰が日本にはいない羊を買い入れて飼養することができたのであろうか。

D 後漢書に謂えらく、其れ虎・豹・牛・馬・羊・鵠無し、と。今 牛有り馬有るも、虎豹無し。開港の初め、白兔を見て詫するに異物と為し、或るひと数十百金を吝しまずして之を買う。鼯毛を以て衣を為す。曾て一羊無きも、後に乃ち北従り直に千頭を購いて畜うに帰す。然れども補牢すること既に晚く、且つ未だ能く蕃滋するや否やを知らず。奇異の物に至りては、見るを経ざる者有り、獸は則ち海驢、海豹、海馬あり、北海に産す。鳥は則ち松雞は雞に似て色は白し、加賀に産す。海鳥は紅喙緑首にして、粉面黒身、足は惟だ三趾のみにして、東人名づけて烏墮鳥と為す、奥州に産す。魚に蛇婆有り、黒魚有り、蜆に似て小、四足あり。馬鞭魚有り、鰻に似て長嘴。琵琶魚

有り、鸚哥魚有り、人面魚有り、皆な形を肖りて之を名づく。翻車魚の形は提鼓の如きも、両翅有り。魚虎は形は円く毛有りて、蝟いに似たり。海牛は牛首に似て全身に堅甲有り。鯖魚に鼻有り。博物館中に皆な之有り。

E ①後漢書 『後漢書』東夷伝に「倭は韓の東南の大海中に在り、山島に依りて居を為し、凡そ百余国あり。……気は温おん暖なんにして、冬夏 菜茹さいじよを生ず。牛馬虎豹羊鵲無し」とある。②羴毛 鳥獸の細く柔らかい毛。『周礼』天官・掌皮に「其の羴毛を共あせて毳と為し、以て邦事に待す。」鄭玄注に「羴毛は、毛の細縹なる者なり。」③補牢 『戦国策』楚策四に「鄙語に曰く、菟を見て犬を顧るも、未だ晚しと為さず。羊を亡いて牢を補うも、未だ遅しと為さずと。」④補牢 は羊が逃げてから檻を補修すること。

④蕃滋 繁殖する。増えること。『漢書』礼楽志二、「郊祀歌十九章・惟泰元」に「百姓蕃滋し、咸な厥の緒に循う。」顔師古注に「蕃は多なり。滋は益なり。循は順なり。緒は業なり。」⑤異物 珍しいもの。『尚書』旅獒に「異物を貴び用物を賤しまずんば、民乃ち足る。」⑥海驢、海豹、海馬 「海驢」はアシカ。「海豹」はアザラシ。「海馬」はセイウチ。⑦松雞 ヨーロッパオオライチョウ。⑧海鳥く烏墮扁 「海鳥」はウトウ（善知鳥）のこと。北日本に生息する海鳥の一種。⑨蛇婆 えらぶうなぎ。明、李時珍撰『本草綱目』卷四十三鱗之一「蛇婆」の集解に「蔵器に曰く、蛇婆は東海の水中に生じ、一に蛇の如し。常に自ら浮游し、採取するに時無し」とある。⑩黒魚 「黒魚」は黒鰻の異名。⑪蛭 「蛭」の誤りか。「蛭」は山椒魚。「蛭」はつくつくばうし。⑫馬鞭魚 ヤガラ。アカヤガラ。一名、戴帽魚。⑬鰻 うつば。⑭琵琶魚 アンコウの別称。⑮鸚哥魚 ブダイ。アカブダイのことか。⑯人面魚 不詳。鯉あるいは鰈魚けの類か。⑰翻車魚 マンボウ。⑱魚虎 ハリセンボン。⑲蝟 ハリネズミ。杜甫「前苦寒行」其一に「漢時の長安雪一丈、牛馬毛寒く縮むこと蝟の如し。」仇兆鰲注所引『炙轂子』に「蝟は鼠に似て、性は獐鈍、物少しく犯せば則ち毛刺攢起す。」⑳海牛 ウミウシ。

F 『後漢書』に「(日本には) 虎・豹・牛・馬・羊・鵲はいない」としている。今では牛も馬もいるが、虎と豹はいない。開港したばかりの頃、白い兔を見て珍しいものとし、ある人が数十百金を惜しむことなくこれを買入れ、細く柔らかな毛で衣を作った。かつては一頭の羊もいなかったが、後にようやく北から直接千頭を買入れ、飼養した。しかしながら、羊が逃げてから檻を補修してもすでに遅く、また繁殖することができたかどうかもわからない。珍しい生き物に至っては、見たことのないものがある。獣としては、海驢あしか、海豹あざじ、海馬せいうちがいて、これらは北海に生息する。鳥には松雞(雷鳥)は鶏に似ていて色は白く、加賀に生息している。海鳥は赤いくちばしに緑の頭部、白い顔に黒い体で、足指は三本だけ。日本人はこれを烏墮うとう鳥と名づけている。奥州に生息している。魚には蛇婆や黒魚がいて、鮠いげ(山椒魚)に似て小さく、四本の足がある。馬鞭魚やがらがいて、鰻うづぼに似ていて長い嘴がある。琵琶魚や、鸚哥魚、人面魚がいて、いずれもその形から名前を付けている。翻車魚まんぼうの形は提鼓のようであり、二つのひれがある。魚虎はりせんぼんは形は円く毛があつて、蜎はりなみに似ている。海牛うみうしは牛の首に似ていて全身に堅い甲羅がある。鯖魚には鼻がある。博物館の中にこれらはみなある。

(以上、林 香奈)

A 「其二百」

紀事祇聞籌海志 事を紀すは祇だ籌ちゆう海志を聞くのみにして
徵文空誦送僧詩 文を徵するは空しく僧を送るの詩を誦するのみ
未曾遍讀吾妻鏡 未だ曾て遍あまねくは吾妻鏡あずまかがみを読まず
慚付和歌唱竹枝 慚はじて和歌に付して竹枝を唱う

〔韻字〕詩・枝(上平四支)

B ①籌海志 『籌海図編』のこと。明の鄭若曾（一五〇三～一五七〇）が総督胡宗憲の命を受けて編纂した倭寇対策の海防と

地理に関する書。十三卷。嘉靖・隆慶・天啓の刊本があるが、天啓本に端を発する胡宗憲を編者とする説は誤り。自注参照。

②徴文 典籍に証拠を求めること。『宋書』礼志三に、「礼記は残缺の書にして、本より備体無く、折簡敗字、闕略する所多し。正に応に例を推して意を求むべきも、動もすれば必ずしも文を徴す可からず」とある。

③送僧詩 僧侶を送る詩。江戸後期の儒

者伊藤威山編『隣交徴書』巻二では、呉顥「送最澄上人還日本国」や貫休「送僧帰日本」、韋莊「送日本僧敬龍帰」など日本の僧侶を送る詩が多く収録されている。自注参照。

④吾妻鏡 東鑑とも。鎌倉幕府の前半を記した歴史書。治承四年（一一八〇）

四月、平氏討伐を命じる以仁王の令旨が伊豆の源頼朝のもとに届いた記事から、文永三年（一二六六）七月の六代將軍宗尊親王

の京都送還までの八十七年間を、和風漢文の編年体で詳述したもの。黄遵憲『人境廬詩草』において、他に『吾妻鏡』を詠んだ

詩は三首見られ、日本の歴史書の代表として位置づけられている。すなわち巻四の「奉命為美国三富蘭西士果総領事、留別日本

諸君子」其三に「王母の環り来りて盛典を誇り、吾妻鏡在りて遺編を訪う」とあり、巻五の「日本国志書成誌感」に「千秋の鑑

は吾妻鏡を借り、四壁の図は人境廬に懸く」とあり、巻六の「歳暮懷人詩」其七に「島夷の史は吾妻鏡を読み、清朝の書は我子

篇を伝う」とある。

⑤竹枝 楽府題の一つ。もともと巴渝の民歌で、中唐の劉禹錫が赴任した時、その曲に当地の風俗や人情を詠じた歌詞をつけたのに始まる。ここでは『日本雑事詩』を指す。

C 日本のことを記したのはただ明末の『籌海図編』という専門書を聞くだけであり、日本についての詩文を典籍に求めても、専ら僧侶を送る詩が詠まれているだけである。中国では未だかつて『吾妻鏡』のような日本の歴史書が広く読まれたことはなく、恥ずかしいことながら和歌に対して、この竹枝体の『日本雑事詩』をもって日本のこ

とを唱う。

D 山海經 已に倭国の事を述ぶ。而るに歴代の史志、輿地風土に於いて、十に一の真ならず。專書は惟だ籌海図編有るのみ。然れども述ぶる所の薩摩の事も、亦た影響なるのみ。(明史芸文志に李言恭の日本考五卷、侯繼高の日本風土記四卷有るも、書皆な世に行われず。余 友人の処よ従り仮りて風土記の抄本を有するも、撰人を著さざるに、未だ是れ侯本なるか否かを審らかにせず。書は極めて陋にして、觀るに足らず。)唐人以下、日本の僧を送る詩は至つて多かりしも、曾て風俗には及ばず。日本は旧とより已に史有るも、海禁の嚴なるに因りて、中土録に著するを得ず。惟だ朱竹垞うだ 吾妻鏡一部を收むるのみにして、故に詳らかにする能わず。士大夫の足迹は其の地に至らず、至る者も又た其の書を讀まざるに、謬悠なるも怪しむに足る無きなり。宋濂集に日東曲十首有り、昭代叢書に沙起雲の日本雜詠十六首有り。宋が詩に自ら之を海東の僧に問うも、僧答うる能わずと言へるも、亦た知るべし。起雲の詩は僅かに長崎の民風を言うのみにして、文も又た甚だ陋なり。尤西堂の外国竹枝詞に至りては、日本は止だ二首なるのみ。然れども豊太閤の事を述ぶるは、已に謬あやまりて言う可からず。日本は我と僅かに衣帯の水を隔つるのみ。彼の我が事を述ぶるは、屋に積みて棟に充つれども、而るに我の彼を記載する所は、第ただ以て一嚀いっさやくに供するのみ。余甚だ之を惜しむ。今大使の後に従いて、其の大要を挾ひび、日本志を草して四十卷を成す。復た雜事を挙げて、国勢、天文、地理、政治、文学、風俗、服飾、技芸、物産を以て次と爲し、衍つなして小注を爲し、之を弗つなぐに詩を以てす。余 文ならずと雖も、然れども書に考し、士大夫に徴して、誤れば則ち又た改め、故に壁に嚮むかいて揣摩しするの譚に非ざるなり。第だ方言に通ぜず、終に多謬を慮りて、後來の者の之を訂正するを願うのみ。此の詩は日本の書籍を徵引するに、仍りて其の年号を用いざる能わず。日本史は中土に伝本少なく、惟だ近世の李氏申耆の紀元篇、林樂知の四裔年表は

偶に誤り有りと雖も、尚お其の世を考うべきなり。余は別に中東年表を作りて日本志に附す。詩中の所有年号世系は、今復たは詳註せず。光緒龍飛紀元五年春三月、遵憲自ずから識す。

E ①『山海經』已述倭国事 『山海經』卷十二「海内北經」に「蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り。倭は燕に属す」とある。

代史志 『漢書』地理志に「夫れ楽浪海中に倭人有り、分れて百余国と為る。歳時を以て来りて献見すと云う」とあり、これは倭が中国の正史に登場する最初である。漢以降の正史における日本の記録は、唐までは倭人伝または倭国伝、宋以降は日本伝に見える。

③『籌海図編』所述薩摩事 『籌海図編』卷二下の「日本島夷入寇之図」には、「日本」という島のそばに「薩摩州」、「五島」、「対馬島」などが標注され、それぞれ倭寇侵略の航路が示されている。

④影響 風聞による不確実なこと。清の徐作肅「侯方域『朋党論』評」(侯方域『壮悔堂文集』卷之七、『続修四庫全書』別集類所収)に「朝宗の家学は最も熟し最も悉す。故に兩篇の議論は鑿鑿として、一字として依傍影響するもの無し」とある。

⑤『明史』芸文志 『明史』卷九十七「芸文志」二「地理類」に「李言恭『日本考』五卷、侯繼高『日本風土記』四卷」とある。

⑥李言恭『日本考』 李言恭(一五四一—一五九九)、字は惟寅、号は青蓮居士、又は秀岩道人。江蘇省盱眙の人。万曆三(一五七五)年に臨淮侯を継ぎ、南京を守備し、後に知太保總督京営戎政に任ぜられた。詩文をよくし、著に『貝葉齋稿』、『青蓮閣集』など。万曆刊本『日本考』五卷は「總督京営戎政少保兼太子少保臨淮侯李言恭、協理京営戎政都察院右都御史兼兵部右侍郎郝杰考梓」とあり、双方の官職を重ね合わせると、万曆二十(一五九二)年七月から翌年十月までの刊行ということになる。なお、渡邊三男(『訳注日本考』解説、大東出版社、一九四三年)、福島邦道(『新修訳注日本考』「解説」追考、新典社、一九八五年)、汪向荣(『汪向荣、嚴大中校注『日本考』所収「關於『日本考』」、中華書局、一九八三年)や時培磊(『臨海東觀——明清史学中的日本研究与認識』、科学出版社、二〇一七年)らの研究によると、『日本考』と『日本風土記』は一書二刻、すなわち内容や体裁は同じだが、著者や版本は異なるという。

⑦侯繼高『日

本風土記」 侯繼高（一五三三～一六〇二）、字は龍泉、江蘇省盱眙の人。浙江および広東総兵官などを歴任。著は『全浙兵制考』、『日本風土記』など。『日本風土記』は『全浙兵制考』三巻の付録として、明の万曆二十一年（一五九三）年に刊行された。内閣文庫蔵の刊本や抄本はいずれも『日本考』と同じく五巻であり、黃遵憲が自注で依拠した『明史』芸文志の四巻とは異なる。⑧朱

竹垞收『吾妻鏡』 朱彝尊（一六二九～一七〇九）、字は錫鬯、号は竹垞、浙江省秀水の人。翰林院檢討として『明史』の編纂に

参加。著に『曝書亭集』、『詞綜』、『經義考』など。朱彝尊「跋吾妻鏡」（『曝書亭集』巻四十四）によれば、前に慶長十（一六〇五）

年の序があり、後に寛永三（一六二六）年林道春の後序があるという。更に「康熙甲辰に是の書を郭東高氏の稽古堂に観るを獲て、後ること四十三年にして、乃ち插架に帰するも、第六・第七二巻は失い去るを惜しむ」とあり、康熙三（一六六四）年に

『吾妻鏡』に出会ってから、四十三年後の康熙四十六（一七〇七）年によく架蔵するようになったが、すでに第六と第七十二巻が散佚してしまったという。なお、朱彝尊蔵本『吾妻鏡』は後に曹寅（一六五八～一七二二）の所蔵となり、現在は中国国家

図書館の所蔵である。蔵書には「棟亭曹氏蔵書」印が押され、第一巻の巻頭には「朱彝尊錫鬯父」印があるという（馮佐哲、王

曉秋「吾妻鏡」与「吾妻鏡補」——中日文化交流的歴史見証、『文献』一九八〇年第一期参照）。なお、翁広平（一七六〇～一八四二）は嘉慶十九（一八一四）年、数十種類の日本史書を援用して『吾妻鏡補』（別名『日本国志』）三十巻を完成させたが、刊行

されなかったという（王宝平編著『吾妻鏡補』——中国人による最初の日本通史、朋友書店、一九九七年）。⑨ 謬悠 荒唐無稽な

話。『莊子』天下篇に、「莊周 其の風を聞きて之を悦び、謬悠の説、荒唐の言、無端崖の辞を以てす」とあり、成玄英の疏に「謬は虚なり。悠は遠なり」とある。⑩ 宋濂集有日東曲十首 宋濂（一二一〇～一三八二）は元末明初の学者。字は景濂、号は潜

溪。浙江省金華の人。明の開国にあたり、礼楽制度の整備に功績を挙げ、また明太祖の命を受けて『元史』を編纂した。著に『宋

学士全集』など。「日東曲」十首は『蘿山集』巻四に見え、詩題は「賦日東曲十首」に作り、自注に「問海上僧、僧多不能答、時

辛丑冬十月也」とあり、元の順宗の至正二十一年（一三六一）年辛丑、宋濂五十二歳の作と分かる。『隣交微書』巻二所引「賦日東

曲十首」の自注に「辛酉冬十月」に作るが、宋濂は明太祖の洪武十四（一三八二）年辛酉五月に左遷地の夔州で死去したため、誤りである。なお、『蘿山集』全五巻は宋濂の入明以前の詩四百六十余首を収めているが、『宋学士全集』などに収録されず、抄本は日本の内閣文庫や国立国会図書館に見え、それをもとにして黄靈庚編輯校点『宋濂全集』全五巻（人民文学出版社、二〇一四年六月）に収められている。

⑪昭代叢書 『昭代叢書』は清の張潮（一六五〇～一七〇九、字は出来、安徽省歙県の人）の編纂した叢書名。甲乙丙の三集に分かれ全部で一五〇巻。尤西堂の『外国竹枝詞』及び沙起雲の『日本雜詠』は『昭代叢書』甲集第四帙巻二十六に収録。

⑫沙起雲日本雜詠 沙起雲は福建の人、生没年不詳、清初の屈大均「送沙子雨往安南」（清康熙刻凌鳳祥補修本『翁山詩外』巻三）に「閩越の奇人沙起雲、茫茫たる浮海 秋雲を凌ぐ。……琉球日本 一再として至り、薩摩長らく

諸郎君に揖す」とあるように、琉球と日本を頻繁に往来していた。『日本雜詠』は全部で十六首、新年、批龍、中元、花街などの風習を詠じたもの。⑬海東 東の方の海。唐詩では新羅と日本の両方を言う言葉として多用されるが、ここでは日本を指す。

中唐の朱千乗「送日本国三藏空海上人朝宗我唐兼貢方物而帰海東詩」（『全唐詩補編』引『弘法大師全集』第七巻）に「去歲 秦闕に朝し、今春 海東に赴く」とある。なお、宋濂の「賦日東曲」自注では「海上」に作る。⑭尤西堂外国竹枝詞 尤侗（一六

一八～一七〇四）、字は展成、号は悔菴、良齋、西堂老人など。江蘇省蘇州の人。康熙十七（一六七八）年博学鴻詞科に及第、翰林院檢討を授けられて『明史』の編纂に参与。著に『西堂全集』、『西堂余集』、『鶴栖堂集』など。『外国竹枝詞』は『明史』外国

伝編纂の過程で詠じたものであり、全部で百首（附土語十首）。その中で日本を詠む詩は二首、朝鮮は四首、琉球は二首ある。

⑮豊太閤 豊臣秀吉の敬称。太閤は太政大臣の敬称。秀吉は初名、木下藤吉郎、織田信長の後を継いで天下を統一。天正十三（一五八五）年に関白、翌年太政大臣となり、豊臣の姓を賜った。『外国竹枝詞』日本其一に「日出の天皇は至尊と号し、五畿七道 附庸の臣。空しく歴代に伝う吾妻鏡、大閤は終に木下の人に帰す」とあり、自注に「隋の時に書を致し、日の出づる処の天子と自称す。国中天皇を称して尊を以て号と為す。五畿七道、三島、附庸の国百余有り。吾妻鏡は本国の君臣の事蹟を紀す。吾妻は鳥

の名なり。木下の人 平秀吉為り。万曆中倭国を篡奪して、自ら大閼王と号す」とある。吾妻を鳥の名とし、秀吉を倭国の篡奪者としたのは、誤りである。

①⑥ 隔衣帶水 一筋の帯のような狭い川または海、また、そのような狭い水を隔てて近接しているさま。『南史』陳後主紀に、「我 百姓の父母為り。豈に一衣帶水もて之を拯^{すく}わざる可けんや」とある。

①⑦ 積屋充棟 部屋中に満ちるほど多いさま。万曆四十六（一六一八）年六月二十二日戸部尚書李汝華の上策文（明、程开祜輯『籌遼碩画』卷八）に「百官及び軍士の空名の賞賜を備うるは、屋に積み棟に充ちて、其の数を計らず」とある。

①⑧ 一噓 一笑の意。欧陽脩「雪」詩（『歐陽文忠公集』卷八十五）に「我為に其の端を発するに非ざる自^よりは、口を凍じて何に由りてか一噓を開かん」とある。

①⑨ 草日本志 日本志とは『日本国志』のこと。黄遵憲は一八八二年三月、サンフランシスコ総領事に転任するまで、『日本国志』の資料

収集を済ませたが、最終的に編纂作業を完成させたのは光緒十三（一八八七）年、故郷の梅州においてであった。『日本国志』は四十卷五十余万字、国統、隣交、天文、地理、職官、食貨、兵志、刑法、學術、礼俗、物産、工芸等の十二志に分かれ、明治十年代までの日本の政治、経済、軍事、法律、文化、教育、風習、物産等について網羅した書。

②⑩ 衍為小注弗之以詩 「日本雜事詩自序」に既出。補注参照。「弗」は肉などを突き刺して火にあぶるさしぐし。韓愈「贈張籍詩」（『全唐詩』卷三四〇）に「試

みに詩義を將つて授くるに、肉を以て弗^くを貫くが如し」とある。

②⑪ 嚮壁揣摩 壁に向かって推しはかること。『說文解字』序に「故に正文を詭更し、壁に嚮いて虚造し、知る可からざるの書は、変乱常行にして、以て世に耀^{かがや}く」とある。また、『戦国策』秦

策上に「（蘇秦は）乃ち夜に書を發^{ひら}き、篋^{けつ}を陳^{ちん}ぬること數十、太公陰符の謀を得。伏して之を誦し、簡練して以て揣摩を為す」とある。

②⑫ 李氏申書紀元篇 李兆洛（一七六九—一八四一）、字は申耆、号は養一、江蘇省常州の人。嘉慶十（一八〇五）年に進士となり、鳳台（安徽省淮南）の知県を経て、江陰（江蘇省無錫）の暨陽書院主講などを務めた。陽湖派の代表者として、桐城派と異なり、文章は古文と駢文の兼修を唱え、『駢体文鈔』を編纂。地理や今文経学にも通じ、考証学の論著「李氏五種」や『養一齋文集』『養一齋詩集』などがある。『紀元編』は「李氏五種」に収録され、卷上「紀元総載」、卷中「紀元甲子表」、卷下「紀元

編韻」巻末「紀元編韻補」から成り、巻上「紀元総載」附「外国年号」に「日本」条があり、継体から光格までの歴代天皇名と年号が列挙されている。②③林楽知『四裔年表』林楽知 (Young John Allen、一八三六―一九〇七) は清末のアメリカ人宣教師。

『四裔編年表』四巻は一八七四年に刊行された中国紀年と対応の日本、インド、ペルシアなどを配列させた詳細な年表。②④

中東年表 『日本国志』巻頭につけた詳細な中日対照年表。辛酉・周恵王十七年・神武元年(紀元前六六〇)に始まり、辛巳・

大清光緒七年・明治十四年(一八八二)に終わる。②⑤光緒龍飛紀元五年 一八七九年。龍飛とは、龍が飛ぶこと。転じて、天

子の即位を言う。『易経』乾卦に「龍飛 天に在り、大人を見るに利^よし」とあり、張衡「東京賦」(『文選』巻三)に「我が世祖は之を忿り、乃ち龍は白水に飛び、鳳は參墟に翔ぶ」とある。

F 『山海経』にすでに倭国のことについて述べている。しかし、歴代の歴史書は、日本の地理風土において、十に一つも確かな記述がない。専門の研究書として、明末の『籌海図編』があるのみだが、そこで述べられている薩摩の事も、また風聞による不確かなものである(『明史』芸文志に李言恭『日本考』五巻と侯繼高『日本風土記』四巻を載せるが、いずれも世に行なわれていない。私は友人から『日本風土記』抄本を借りてきたが、撰者を記しておらず、侯繼高の著かどうかも定かではない。極めてみすばらしい内容であり、読む値打ちもない)。唐人以降は、日本の僧を送る詩がとりわけ多いが、日本の風俗を詠むには至っていない。日本はもともと歴史書があるのだが、海禁が厳しいため、中国でこれらを著録することができなかった。ただ朱竹垞が『吾妻鏡』一部を手に入れただけなので、詳しく記すことができなかった。士大夫たちは日本まで足を伸ばさないし、至るものがいても、日本の書籍を読まないで、でたらめが多いのも無理はない。宋濂集には「日東曲」十首があり、『昭代叢書』には沙起雲の「日本雜詠」十六首がある。しかし、宋濂の詩に自ら「これを日本の僧に聞いても、僧は答えられない」と述べているところを見ても、そのこ

とが分かるのである。沙起雲の詩は僅かに長崎の風俗を述べただけで、自注の文章も知識が甚だ浅薄である。尤西堂の「外国竹枝詞」に至っては、日本に関するものはただ二首のみであり、それなのに豊太閤の事を述べるところを見ると、すでに間違いで話にならない。

日本と我が国とは僅か一衣帯水を隔てるのみである。日本人が我が国のことを書いた書籍は、数え切れないほど多い。しかし、我が国で日本のことを記したものは、ただ一笑に付するほどのものばかりで、私はこのことをとても残念に思っている。今、何如璋大使に従つて来日し、日本の大要を選んで、『日本国志』を草して四十巻となった。また、その中から雑事を取り上げて、国勢、天文、地理、政治、文学、風俗、服飾、技芸、物産の順序に従つて、これを敷衍して自注を加え、詩によつて繋いでいった。私は文章が下手だが、書籍を調べたり、日本の知識人に聞いたりして、誤まりがあれば改めたので、壁に向かって推測するような話ではない。ただ日本語に通じないので、結局誤りが多いのではないかと案じ、後世の訂正を願うばかりである。

この『日本雑事詩』で日本の書籍を引用する時、日本の年号をそのまま用いざるをえない。中国では日本史に関する伝本が少なく、ただ近頃李中耆の『紀元篇』と林樂知の『四裔年表』などは、たまには誤りがあるけれども、その年代を調べることができる。私は別に「中東年表」を作つて『日本国志』の巻頭に置いてある。雑事詩の中で用いられたすべての年号や世系は、今は繰り返し注記しないことにする。光緒龍飛紀元五（一八七九）年春三月、黄遵憲自ら識す。

G 黄遵憲は光緒十六（一八九〇）年七月、ロンドンの公使館において、『日本雑事詩』定本の自序で雑事詩執筆の目的・経緯・改訂などについて次のように述べている。

余於丁丑之冬、奉使隨槎。既居東二年、稍與其士大夫遊、讀其書、習其事、擬草日本國志一書、網羅旧聞、參考新政、輒取其雜事、衍為小注、弗之以詩、即今所行雜事詩是也。

時值明治維新之始、百度草創、規模尚未大定。論者或謂日本外強中乾、張脈憤興、如鄭之駟。又或謂以小生巨、遂霸天下、如宋之魴、紛紜無定論。余所交多旧学家、微言刺譏、咨嗟太息、充溢於吾耳。雖自守居國不非大夫之義、而新旧同異之見、時露於詩中。及閱歷日深、聞見日拓、頗悉窮變通久之理、乃信其改從西法、革故取新、卓然能自樹立、故所作日本國志序論、往往與詩意相乖背。久而游美洲、見歐人、其政治學術、竟與日本無大異。今年日本已開議院矣、進步之速、為古今万国所未有。時與彼國穹官碩學、言及東事、輒斂手推服無異辭。使事多暇、偶翻旧編、頗悔少作、点竄增損、時有改正、共得詩數十首、其不及改者、亦姑仍之。

嗟夫、中国士夫、聞見狹陋、於外事向不措意。今既聞之矣、既見之矣、猶復緣飾古義、足己自封、且疑且信、逮窮年累月、深稽博考、然後乃曉然於是非得失之宜、長短取舍之要、余滋愧矣。況於鼓掌談瀛、虛無縹緲、望之如海上三山、可望而不可即者乎。又況於排斥談天、詆為不經、屏諸六合之外、謂當存而不論、論而不議者乎。覬國豈易言耶。稿既編定、附識數語、以志吾過。

光緒十六年七月、黃遵憲自序於英倫使館。

(以上、劉 雨珍)

(本稿は科学研究費基盤研究C(課題番号22K00366)による研究成果の一部である。)

(はやしかな・京都府立大学教授)

(りゅううちん・南開大学教授)